

# 現代文化的人生の危機と転向、そして統一思想

The Crisis of Modern Cultural Life, Turning, and Unification Thought

Cho, Hyung-Kook (Sun Moon Univ.)

現代人の弱さは、まさに時代運命の真の姿を直視できない無能力さにある。(M.Weber)

創造本然の人間たちで構成される社会においては、知的・情的・義的活動の原動力が心情、しかも愛であり、学問も芸術も規範も全て心情がその動機となり、愛の実現がその目標となる。

ところで、学問分野・芸術分野・規範文化の総和、すなわち人間の知的・情的・意的活動の成果の総和がまさに文化（文明）である。(統一思想要綱、62-3)

## I.序 論

この著書の目的は、過ぎし 20 世紀を通じて全世界に広まった西欧（とりわけ、現代）的人生の論理と文法が、なぜ虚無主義の文化に転落するしかなかったかという分析と共に、多くの知性人が、これからの私たちが生きていかなければならない 21 世紀を、生命と霊性の時代、すなわち新たな精神性の時代としてどのように考えるかについて、統一思想の立場で学問的論理を模索してみようとするところにある。筆者のこのような問題意識は、私たちが生きているこの時代が切実に要求する学問的そして生活世界的事態 (Sache) ゆえ、多くの科学者・哲学者だけでなく、宗教人、未来学者たちが誰彼となく人種と宗教、そして国境を越え、または学者間の研究を通じて多様な答えを出している実情があるからだ。韓国でも少し遅い感があるが、過ぎ去った 90 年代初期から多様な生命と環境哲学、そして霊性と平和の哲学論議を通じて、21 世紀のための新たな人生の論理と文法を模索しようとする運動が活発に起きている。1)

これと共に全世界の多くの知性人が、21 世紀のための新たな生命の哲学・霊性の文化を模索していきつつある今日、統一思想を研究する私たちは、いかなる学的な構成作業を通じて世の中と対話し、また彼らを説得することができるだろうか？思想はその時代の産物でしかないし、また人生のあらゆる問題と取り組む中で生じる精神的産物であることを考えるならば、今日統一思想研究者たちは、やはり 21 世紀という実存的状況が提供している環境と生態（生命）の問題、人間性喪失と共に現代文化に濃厚に敷かれている虚無主義的雰囲気克服できる代案模索と新たな人生の文化運動を誠実に遂行しなければならない。

このような問題意識の下、筆者は 20 世紀韓国の地で文鮮明先生によって生じたみ言と実践

の内容を、心情真理事件と規定し、その心情の概念が持つ生命哲学的・靈性文化的性格を浮上させてみようと思う。2) このように大きい論理を構成するために、まず、1.過ぎ去った20世紀を反省してみる契機として、ニーチェと虚無主義について考えてみる。過去に対する反省なしでは新たな未来を考えることができないように、私たちが生きてきた20世紀現代文化が、なぜ虚無主義文化に転落するしかなかったかについて振り返る。そして20世紀現代文化が持っている虚無主義の根について理論的考察を試みてみようと思う。そのような理論的考察で筆者は、ニーチェと共に20世紀現代文化状況を決定した三人の理論家、すなわち、マルクス (K.Marx)、ダーウィン (C.Darwin)、そしてフロイト (S.Freud) について論究したい。次に2.虚無主義を克服できる新たな転向のための力と知恵を統一思想の立場で論議してみようと思う。特別に心情的存在としての人間の理由と生活の力としての訓読文化(み意を心に刻む生き方)が持つ時代的意義と心情的人生との影響関連について考察していく。最後に3.統一思想が指向する3大祝福(3 Great Blessing)の生き方を通して、心情文化世界創建こそが21世紀人類が指向しなければならない文化的指向点とするところであり、この時代、統一思想研究者たちの理由を結集させなければならない究極的事態であることを力説する。統一思想研究者たちは、心情事件の真理(心情事件学)が提示しているこの時代において、時代を越えた予言者的な洞察についてもう一度注目しなければならない。

## II.本 文

### 1. 現代文化的人生(虚無主義)の根

#### 1) <神は死んだ(Gott ist tot)>

筆者は今日西欧を通じて、全世界で影響力を及ぼしている現代文化的人生の三軸を、個人主義とフリーセックス、そして人間中心の文化と見る。ところで、このような疎外と暴力の文化的性格を胚胎した現代文化的生き方は、統一思想の立場で見ようとするならば、まさに神様の3大祝福の価値(The Value of 3 Great Blessing)をなくした結果である。私たちがこの三つの人生の軸の共通点を考えてみればわかるように、現代文化的人生は一言で言えば、神を追い出し、神がいなくなった人間の欲望の市場で起こっている人生である。西洋哲学史的に見れば、虚無主義の根は神の死と深い関連がある。ニーチェ(F.Nietzsche)は「神の死」という事態(Sache)を次の通りに叙述する。

「もし神々が存在するならば、私は、私が神でないという事実をどのように耐え抜くことができようか!だから神々は存在しない。実に私はこのような結論を引き出した。今はその結論が私を引っ張っていく。神は一種の憶測だ。しかし、その誰がこの憶測を起こす煩

悶全てを飲みこんでも死ねないことがあるだろうか？創造する者から信念を、驚から高く飛ぶことができる飛翔の自由を奪うべきか？神とは、まっすぐなことをわい曲にして、立っている全てをふらつかせる一つの理念だ。」3)

虚無主義は、事実徐々に見えない魔の手のように、かなり以前から伸びてきた。虚無主義の魔の手が効力を発揮させるためには、最初に神を追い出さなければならない。神を私たちの日常生活の中から追い出さなければならない。ハイデッガー(M.Heidegger)によれば、ニーチェは西洋形而上学者で、近代形而上学最後の完成者である。4) 事実西欧近代化の全過程が徐々に神の首を締めながら殺してきた歴史的な過程だったことから、中世の時から神のための絞首台(断頭台)が用意されたと言える。それはまさにトマス・アクィナス(T.Aquinas)が神の存在証明のための五つの道があると言った時から始まっていた。その時彼はすでに五つの神の棺を組んでいた。神の存在証明のための五つの道、それは逆に、もしその五つの道が誤った道でもその道で神を証明できないというならば神は存在しないことになる。西欧神学では人間の理性を総動員して用意した神の存在証明のための五つの道が、そのような方式だけでは神の存在を証明をできないということがカント以後、公然として理解されてきた。

事実トマス・アクィナス自身も、晩年に神について書いたその全てのものがゴミに過ぎないと嘆いたのではないか。神と一つになるという霊的体験をした後、彼は自身の一生の神学者としての全ての努力が無駄になったことを告白したのだ。まさにこのように、中世自体が神に接近できる唯一の道で、理性的、合理的な道だけを考えていた。言い換えれば、ひたすら理性的な道、合理的な道、論理的な道、計算の道でだけ、神に至ることが出来ると信じられていたのである。中世自体がいわゆる知ることと信頼、その二つを結合させたといいつつも、全ての信頼を合理化させようと努力したということになる。その努力の結果が近代になって花を咲かせ、それは結局神の死の宣言と共に20世紀の神の死の神学(死神神学)まで連結してしまったのである。合理化させることができる信頼だけを信頼だと判断した。頭、頭脳、理性でだけ神に達することができ経験できると見た、それがまさしく神に至る真の道を遮断することになったのである。神に至る他の全ての道を排除した為、その道について行ってもその道の終わりに神はなく、逆にゴム風船のように膨らんだ人間の欲望と意地だけが、がんとして立ちほだかっていた。

## 2) マルクス、ダーウィン、フロイトと20世紀現代文化

キリスト教とプラトンの哲学(神学)で明らかになった西洋で、神の死が宣言されて西洋形而上学の歴史の中で存在・神・論的構成枠組み(Die Onto-Theo-Logische Verfassung der Metaphysik)の中に閉じ込められてしまった神様は、もう剥製化され博物館に展示された

まま、時々来る観覧客たちのための文化的アクセサリーになってしまった。5) このような時代的な波に力を得て、20 世紀に入るなり一層荒々しく実証主義的傾向、あるいは無神論的傾向が、学問世界だけでなく生活世界にまで深く浸透してきてしまった。これをフッサール (E.Husserl, 1859-1938) は、『ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学 (Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie)』を通じて、克服してみようとしたのである。

このような現代文化的人生の状況の中で、20 世紀フランスが生んだ世界的な哲学者である、ポール・リクール (P.Ricoeur) によれば、20 世紀現代文化的状況を決めた三思想家は、すなわち、マルクス、ニーチェそしてフロイトだ。リクールはこれらの共通的な学問的傾向を称して「疑いの解析学 (Hermeneutics of doubt)」と呼んだ。6) ニーチェの虚無主義に関しては、前述で論究したのでここで筆者はニーチェの代わりにダーウィンを共に考えてみようと思う。チャールズ・ダーウィンは単純な生物学者と見てはいけない。ダーウィンの『種の起源 (The Origin of Species)』の論理の本質には自然選択、生存競争という闘争を土台にした世界観 (自然観) が前提になっている。それでダーウィンは生命も神の創造によったのではなく、生存競争によって進化しただけであり、従って優越な者が劣等な者を支配することになるという論理を展開した。このようなダーウィニズムは、マルクス主義の道を案内したことになり、また人種優越主義まで引き起こさせた。これらマルクス主義、ダーウィン主義、フロイト主義はお互いに強い影響を及ぼしながら、過ぎし世紀現代文化の地形を決定したのである。

ところで私たちが哲学的反省をしてみる時、これら三つの主義から得た核心は何か？憎しみと憎悪の階級闘争 (マルクス)、適者生存と無限競争 (ダーウィン)、そして肉体的欲望に基づいた快楽主義と性開放 (フロイト) の追求によって、西欧人たちだけでなく今日全世界の多くの人々がそのような価値観の影響の下に生きながら真の生命の喜びと心情的満足が得られなくなった為虚無主義と快楽主義が奈落の底に陥る姿を見ながら、私たちはいかなる考えと人生の文法を提示しなければならないのだろうか？

私たちは統一思想、すなわち心情と真の愛の目で、過ぎ去った 20 世紀の考えであるこの三つの主義の同質性をはっきりと比較・分析した後、韓国人の心情的人生の世界を土台に生じた統一思想的論理構成と代案を具体的に提示していくべきである。7) 統一思想研究院の初代院長だった李相軒院長 (Dr.LeeSang Hun) は、20 世紀現代文化に刻印したこの二つの主義を次の通りに評価する。8)

	マルクス主義 神様の存在否定	ダーウィン主義 神様の創造否定	フロイト主義 神様の真の愛否定
唯物論	人間は先に衣食住に執着しなければならない。 精神は頭脳の産物、またはその機能である。	自然環境が生物を進化させる。	生物学的唯物論 リビドー（性的エネルギー）理論。
闘争理論	事物は闘争によって発展する。	生物は生存競争によって、進化する（自然選択説）。	人間は全ての女性を征服しようとする、限りない欲望の操縦を受ける存在である。
人間観	人間は経済的利益を追求しながら、互いに敵意を抱いている存在として、支配したり支配を受ける。	人間は、生存本能により生きていく動物である。	人間は、性的本能に操縦される動物である
社会観	人類歴史は階級闘争の歴史だ。生産力が歴史発展の原動力である。	人間は社会において優越な者が劣等な者を征服して、優位に立つ（社会ダーウィニズム） 人類歴史は抑圧の歴史。	性的エネルギーが文化の原動力である。
解放理論	労働者が資本家を打倒して、共産主義の社会を立てる。	劣等民族は打倒され、優秀民族の世界を作る。	エロスを解放して、エロスの文明を作る。また知恵の木の実を取らなければならない。

### 3) 理性中心→存在者中心→人間中心→西洋中心

先立って調べたマルクス、ニーチェ、フロイトが、20世紀中盤まで猛烈に猛威を振るっていた時、西洋哲学者などの中には、自分たちが重視してきた理性について懐疑を感じながらも感性と狂気、そして暴力とセックスについて探求の熱を上げ始めていた。学問的論理の場でも当たり前のごとくセックスと狂気そして精神病院と監獄について、理性中心の透明な社会では光を見られなかった主題についても関心を持ち始めていた。その代表走者たちがまさにフランス哲学者たちである、フーコー(M.Foucault)、リオタール(J.F.Lyotard)、デリダ(J.Derrida)等である。彼らを学界ではポストモダニストというが、なぜこのような学問的傾向が起きたのか？それはまさに前述したマルクス、ダーウィン、フロイトだけ

でなく、20世紀までの大部分の哲学者たちが言ういわゆる同一性の論理、理性の権力だけを重要視してきたので、その反対給付に浮上したのだ。近頃<ポストモダニズム>だとし、脱近代を主張する人々が批判する中その一つがまさにこの近代化が持つ理性中心（ロゴス中心）の態度である。純然な合理化過程、頭だけで全てを解決しようとする冷徹な理性で全てを判断しようとするそのような理性中心、そして別の人間中心の傾向を批判しようとしたのである。私たちはここでまた存在者中心、更に西洋中心を確認することができる。このように西洋の近代化は、一言で神または神聖なこと、神的であることを私たちの生活世界から追い出した後可能だったことである。言い換えれば近代化の過程、それはまさしく世俗化の過程であり、神殺しの過程でもあった。これについて近代の最後の哲学者ニーチェが「神は死んだ」と宣言したのである。虚無主義の根、それは人間には様々多くの能力があるのにも関わらず、その中で理性的な能力だけを極大化させ、理性的に接近できる存在だけを唯一のこととして見る、またその中に入らないのは無いものと見たところに起源していると言える。一言でいえば西洋でとりわけ現代の人生の文化は徹底した存在者中心であり、その存在理解の地平の中に入らないものは除去してしまう<無除去の歴史>と表現することができる。9) ところで今日その除去は無気亡霊のように、幽霊のように私たちの周囲を回りながら、自らを苦しめている。それがまさに虚無主義である。それでは、このような虚無主義的人生の文化を克服できる21世紀の新たな文化運動として、文鮮明先生の統一思想（心情真理事件）が持つ時代的意義について考えてみることにしよう。

## 2.現代文化的人生の危機（Crisis）と転向（Turning）

### 1) 21世紀ウェルビーイングの追求と生命、靈性に対する関心

21世紀を迎えて、死と殺しの文化である人虚無主義文化を克服できる統一思想的論理摸索を語る前に、一般学界で起きている多様な努力を簡単に調べることにしよう。私たちが21世紀を文鮮明先生の規定の通り、後天時代が到来した時代、神様の祖国と平和の王国が開かれる時代と規定しながら、新たな心情革命の時代、神文明の時代だと主張すれば変だと考える人々が多くいる。科学と技術が私たちの運命になってしまった今日、何が心情で、神文明の時代なのかと反問する人々が多いただろう。技術革新こそ先進国の列に上る近道であり、経済的利益を創出する経営学的思考方式に染まり、統一思想で強調する心情的価値については冷笑的に眺める人々が多くいる。しかし私たちが今日いわゆる先進国とその国の人々の生活の深いところを知って体験してみれば、形而上学がない民族は真の意味で先進国になれず、いわゆるソウル マネジメント（Soul Management）を分からない人は真の意味で最高経営者になりにくいことが分かる。10) 私たちは外見だけにとらわれたり、落胆せずに、事態の核心を見抜いて時代精神を読み出すことができる洞察力を育てなければならぬ。

いずれにせよ 21 世紀を心情と新たな神文明の時代になると言えば、冷笑的に考える人々はデジタル技術文明のこの時代に、心情で何をどうするのかと言う。ところが既に 20 世紀後半から多くの世界的な知性人が人類救援のために、もはや人間は自分自身の能力を再考しなければならないと語ってきた。「技術と科学が極に達した現代が果たして人類に幸福を約束しているのか?」、「人類に救援を約束しているのか?」むしろ「技術文明の最高点に登った現代の人間は、人生の意味を探せなくてむしろ自殺を考えるのではないか?」という人生の重病に対する治癒の手を切実に探し求めている。皮肉にも現代であればあるほど、またいわゆる生活水準の高い国ほど、自殺率が高い。それは、人はパンがいくらあったとしても、こころざしがなければ死を選んだ方がましだとするドストエフスキーの言葉通りだ。仮に自殺を選ばなくてもアルコール中毒、麻薬中毒、変態的な性的快楽を追って瞬間瞬間を殺しゆく生活を送ることになる。これは 20 世紀（西欧）現代文化的人生の世界で精神的、霊的な面を排除させ、もっぱら物質的、経済的な面だけにお金、快楽、欲望、所有、消費等等を全面に浮上させ登場することになった物質的繁栄の後の悲劇である。11)

歴史学者トインビー (Arnold J. Toynbee, 1889-1975) は、20 世紀の世界を支配しているヨーロッパ文明に非常に大きな弱点があることを喚起させた。世界を征服したように見えるヨーロッパ文明は、その力をもっぱら物質文明的側面だけに出していると言えよう。単に科学技術で全世界の物質的な面を掌握しているだけで、そこには精神的な原理が欠如しているということを指摘している。この精神的な原理の欠如、それが大きな空白を作り、その空白が<無>という亡霊で私たち自身を苦しめているのである。12) この無の亡霊を退治するためには、私たちが追い出した神的なもの、神聖なことを再び訪ねて行かなければならない。従って人間の能力には様々な能力があるが、今まで人間は理性的能力、その中でも計算能力、数える能力、何かを創り出す能力、操縦し支配する能力、自分の物として快楽を得る能力、このような物質的なもの、存在者的な次元だけを極大化させてきた。しかしその他にも人間には他の能力もある。その他の能力がまさに霊性、理性の反対給付、または理性的な次元が接近できないといって無視した次元の異なるの霊性の次元である。13)

更にトインビーは、21 世紀が新たな霊性の時代、精神の時代にならなければならないと力説する。ポストモダニストたちが脱近代性として主張していることも、やはり理性とは異なるもの、私たちが理性的なものではないとして無視してきたものをもう一度浮上させてみようという傾向に行っている。理性とは異なるもの、それは何か?それは狂気、暴力、セックスであるかもしれない。彼らはまさにこれらに対して新しく解釈して行こうとしているのかもしれない。ところが彼らが見ている理性とは異なるものもこれが全部ではない。理性的な現実でない他の現実がいくらでもある。それは例えば宗教的、道徳的、芸術的な現実を上げられる。このようなことが特に西洋の現代哲学史が理性では近づけないと言っ

て徐々に一つずつ排除されたのである。一言で宗教・道徳・芸術的な現実への接近を遮った人間の誤った態度は、何よりも無・空・虚のような、無いと言って排除した現実の領域に対する誤った関係である。私たちは無・空・虚のような無いと考える、その無いもの、すなわち無が私たちを苦しめる今日に直面している。その「無いもの」に対する経験の可能性を新たに認め、そこにどのように至ることが出来るかをじっくりと考えてみなければならない。そのような時私たちがその間見過ごしてきた新たな現実が開かれ、私たちに新たな人生の可能性が与えられる。それは、まさにこの観点において東アジアの人々、特に韓国人がようやく隠された才能を広げることができる機会が来たと見ることができる。西洋は理性中心的傾向で発達してきた。西洋人たちは何よりも理性的な能力が極度に発達している。これに比べて、東アジアの人々、特に韓国人はなぜか理性的な能力が西洋人のように発達しなかった。西洋は近代化を経ながら全ての面で合理的になり、西洋人たちはもう合理的になった透明なガラス瓶の中で生きたくないと言いながら、ガラス瓶を壊そうとしている。ところが私たち韓国人の状況は異なる。私たちは過ぎし五千年の歴史、そして近代化が始まって 100 年の歴史の中で、西洋人のように合理的になったことが一度もなかった。私たちの生活が、生活世界をガラスの容器のような透明色を通して見たことがなかった。その透明さを習おうと人生の全分野において経済的、政治的、宗教的な透明さを謳っているが、私たちは不正腐敗に苦しめられているのが事実だ。

ここで私たちが一度深く熟考してみなければならない点がある。その間西洋文化の底辺に敷かれている人間中心、理性中心の態度と東アジア文化での感性中心、脈絡中心の態度全てに限界がありながら、この二つの理由と文化の性格を合わせることができる新たな思想の到来を必要としているという文明史的な要請に耳を傾けるべきであろう。このような側面で私たちは統一思想を新しく理解して見ることができる。21 世紀ウェルビン論理が浮上して、生命と霊性に対する関心が高まりつつある今日、生心の欲望と肉心の欲望、そして性状的価値と形状的価値の調和を通じた心情文化を指向する統一思想の哲学的洞察について注目することになる。特に感性、理性、霊性の次元に合わせて、それぞれの能力の源泉としての心情的存在として人間を見る統一思想の見識は、生命と環境問題で疲弊している今日、人類に切実な存在の知恵を提供することができる。

20 世紀中盤まで西洋人たちが自分たちのことだけが絶対と考えた<ヨーロッパ中心>の視覚と態度によって、今までこの中心に加われない周辺が疎外されたが、このような絶対中心が崩れながら、すでに多中心時代の多元主義時代へ移ってきている。それで今日 21 世紀は相互文化性の時代、多元主義時代に変わりつつ、このような時代を平和に生きていくことができる経済秩序と宗教間の和解、そして文明間の和解の文法を探せ！これが 21 世紀を生きていく私たちの絶対絶命の時代的課題である。



深くて豊富な私たちの生活世界を理性の基準と資本の論理だけで評価しようとする全ての態度は、虚無主義と快樂主義と言うどん底に陥ってしまう。このような虚無主義と快樂主義という亡霊から抜け出すことができる道は何だろうか？このような現代文化的人生の危機を見ている私たちは、いかなる存在知恵を模索することができるのか？このような危機状況を洞察した統一思想では、神様と人間そして自然世界が一つとなった心情文化世界を指向する。この心情文化を指向する統一思想は、新たな神様の解釈、人間の解釈、そして自然の解釈を提示している。14) 人間を理性的動物 (animal rationale) という束縛から解放させ、神様を人間の理性的証明欲から解放させ、自然を利用の対象にしてきた観点から解放させなければならない。このような時代的状况に直面した今日の統一思想研究者たちは文明史的な要求に対応しなければならない。このような脈絡で統一思想の主唱者であられる文鮮明先生は、全世界を巡回されながら<宇宙平和連合>を創設され、『神様の理想家庭と平和理想世界』という人類の普遍的価値実現のためのメッセージを全身で投げかけておられる。文鮮明先生は 21 世紀を生くべき人類のために、心情真理の火花を最後の渾身の力で守りながら、統一思想の精神を実践しておられる。15)

## 2) 文鮮明先生の訓読文化、その統一思想的意義の解釈

次に筆者は、現代文化的虚無主義克服のための努力の一環で、文鮮明先生がそのように強調される訓読文化が持っている統一思想的意義について熟考してみようと思う。文鮮明先生が自ら実践しているこの訓読文化は、まさに私たちの生活の中心に神様を迎えて、心情と真の愛の人生の論理である「為に生きる生活」を実践をせよ、生命を愛する生活、霊性的生活を生きる、心情的存在としての使命を尽くす人になれというのが、新たな時代を開く統一思想主唱者としての洞察でもある。このような点に注目して、筆者はこの訓読文化が持つ意味を統一思想と関連させて、人間の思考に焦点を合わせて考えてみようと思う。

西洋哲学では人間に対する哲学が始まってアリストテレスによって、一段落した時から、人間を際立てて「言葉が話せる生命体」(zoon logon echon) と定義してきた。これが中世ラテン文化圏でなると、「理性的動物」(animal rationale) と翻訳され、中世以後西洋で「人間」といえば当然「理性的動物」と烙印が押されてしまった。人間は神様が創造した全ての存在者の中で、「理性」という特権を持っていると考えられた。故に人間は存在するものの序列の中では、一番上席を占めることができ、他の存在者などを支配することができると思われてきた。以後、人間に対して少しずつ異なる表現をしたが、デカルトの「我思う。故に我あり」(Cogito ergo Sum) や、パスカルの「考える葦である」などの言葉から見ても、やはり彼らは人間を「理性的存在」と見る観点から大きく抜け出すことができなかつたと言える。

ここで筆者はこのような西洋哲学での人間についての定義に対して批判したり間違っていると言いたいのではない。ただ、古・中世を過ぎ近代を経て現代または脱現代を生きる今、そして西洋ではない東アジアしかも韓国の地で生きている筆者の立場で、「思考できる存在としての人間」という定義について、その意味を統一思想の立場でまた熟考してみたいのである。

人間はその「思考できる」という特権で、今日のような技術文明社会を成し遂げることができた。コンピューター技術で全ての存在者などの領域に侵入することができるようになり、地球でない他の星への旅行まで可能になった。このような事実はあまりにも当然視され、また日常化され、私たちに驚かせない。しかし、皮肉にも現代を生きる私たちは私たちの思考を最高に発揮できるにもかかわらず、形而上学的虚無感と人生を豊かにする心情文化的想像力の不在の中で、何か新たな意味、人生の充満感に似たものを渴望している。ここで私たちは人間の「思考する」というその事態 (Sache) について、また問いかけることになる。「人間が思考するとは何をいうのか?」、「人間が神様のみ意を心に刻むというのとは何を意味するのか?」

私たちは毎日思考を通じて計画を立て、物事を処理しながら、他人との出会いを持ちながら生きている。ところで私たちの日常の生活の姿を入念に確かめてみれば、私たちの生活の基礎になる私たちの「思考すること」には二つの性格があることがわかる。最初に、私たちが思考するものには「何かを問い詰めて計算して、私の利益にしようと思う性格」があり、私が出会う他の存在が私の前に向き合い、眺めて理解しまた安心する。このように思考の性格を私たちは計算する思惟、表象する思惟 (Vorstellen Denken) と呼ぶことができる。反面私たちは、例えば、身近な人や知人が死んだなどのニュースを通じて、衝撃的な事件に接したり、その死や事件の意味についてじっくり考える場合もある。このような場合考えるのは、単純に計算して問い詰める次元、すなわち客観的な事実を数え上げるのが理由でなく、その事実の中に隠れている、或いは私たちに投げかけているメッセージを探してみようと思つたのである。このような思考することを私たちはみ意を心に刻む、思惟する心 (Besinnliche Nachdenken)、訓読的な思惟などの表現でその性格を表すことができる。私たちは、ハム・ソッキョン先生の『み意で見た韓国歴史』という本を知っている。私たちの歴史において何年度にどんなことがあって、その次の年に何の事件があった、というような単純に事実を記述して数えるのではなく、その事件がいかなる意味を持つかという、歴史を読む目 (史観) に対する考えを語ろうとしている。私たちは 1970 年の労働者チョン・テイルの焼身自殺を通して、単純に生活が苦しいある労働者が絶叫したという事実だけを語ることもできるが、その事件が韓国現代史での労働運動と民主化歴史に及ぼした歴史的意味について語ることもできる。ヘーゲルの『歴史哲学』構想もこのような人間のみ意を心に刻む、深く思惟する心で人類歴史を見ようと思つた企画で始まった作業

だ。そして歴史神学でもイエスというある人物の十字架の死を、単純な一人の人間の死ではなくその方の死の中で人類の救贖史を見直そうとする考えから計画されたものである。

科学と技術が私たちの運命かのようになってしまった今日、私たちの生活は計算的思惟、表象的思惟に縛られて、それが全てかのように忙しく生きている。それと共にただ「経済至上主義」の人生を駆け登っている。従って人生の意味や共同体と国家、そして摂理の方向などに関する話しの場には、言い換えれば、浅はかな人生でない深みのある人生になるための努力の場にはいつもわずかの人々だけがその場を満たしている。今日広く知られている「人文学の危機」という現象もこのような私たちの人生の文化、生き方と密接な関連がある。

いずれにせよ予言者は、いつもその時代の傾向に逆らうメッセージを投げかけている。私たちと共に 21 世紀を生きおられる文鮮明先生は、「訓読中心の人生」を強調される。文鮮明先生が強調されるこの訓読文化は、いったい生命と靈性の時代を模索するのに何の関係があるのか？私たちが『文鮮明先生御言葉選集』をじっくり分析してみれば、そこには全ての意味を探して意味を付与するみ意を思惟する心から出たみ言だということが分かる。文鮮明先生のみ言は、先生がみ意を心に刻むために思惟することで人間と世界、そして心情の神様を探すための限りない挑戦によって生み育てられた意味の章である。従ってこの時代の訓読事件は私たちの思考が、計算するための思惟から、み意を心に刻むための思惟に転向（Kehre）しなければならないことを啓示している事件である。訓読は私たちの思考がもう少し敬謙になることを要求する。

文鮮明先生の教えによれば、靈性はひたすら神秘的なことでなくまさに私たちの人生に対する深い思惟、訓読的に思考することで湧き出ずる人生の香りのようなものだ。心情（靈性的）の人生とは、真の愛を中心にした思考の力が心情行為を通じて、周囲を和合させる宇宙平和的の人生をいう。従って心情的の人生は、最も創造原理的な人生であり、自然親和的な人生である。20 世紀後半を激しく生きたドイツのハイデッガー（M.Heidegger、1899-1976）は、自身の学問的決断、すなわち存在事件学を通じて、断崖に落ちていきつつある西洋文明の新たな救援の道を模索した。そして、ただ神のみが私たちを救援することができる！（Nur ein Gott kan uns retten！16）という多少予言的な方式で人類の方向を提示した。ハイデッガーは人間欲望の極大化、資本主義の限りない欲望をあおり物質文明に敷かれ圧死する人類に、神様が必要だったことを全身で痛感した。筆者は文鮮明先生が生命と靈性の時代を予備されながら強調された訓読文化は、後期ハイデッガーが強調した、すなわち死方世界（Geviert）17）でいずれは死ぬ者（die sterbliche）としての人間が、生活の中で成し遂げなければならない異なる生き方の定着のための具体的で明確な現実的な実践（代案）と考える。

### 3.3 大祝福 (3 Great Blessing) の生き方を通した心情文化世界創建

科学と技術が私たちの運命になってしまった時代、そして早さが全ての価値の尺度になってしまった今日、人々はこれ以上『なぜ』という問いかけをしない。いや問いかけないようにしている。なぜなら尋ねる人が馬鹿になるためだ。デジタル技術によって、私たちの日常が自明的にシステム化されて良く回っているのに、こういうデジタル時代に「なぜ生きるべきか?」、「私たちの人生の意味は何か?」という問いかけをする人は明らかに反時代的になりやすい人である。しかし皮肉にも全てが他人の顔色をうかがいながら、技術に寄り添って、生きていきながらも、一人になった時私たちは明らかに尋ねている。「私がなぜこの仕事をしながら生きているのか?」、「私は何のために生きるのか?」すぐ答えが出てくる問いではないので、私たちをより一層困惑させる。そのためか特にこの時代、心情文化定着と共に統一思想を研究する私たちは、人生と時代の意味を探す問いかけをしながら、その問いと共に生きる者ゆえ可能であることを知っているのも、このような問いが持っている事態 (Sache) の深刻性と重さを分かって、より一層文鮮明先生のみ言を大切にしておくことになる。

『原理講論 (Divine Principle)』と『統一思想要綱 (New Essentials of Unification Thought)』、そして『文鮮明先生御言葉選集 (The Sermons of the Reverend Sun Myung Moon)』で強調している 3 大祝福の生き方 (Modus Vivendi) は、私たちが自分なりに生きようと追い出した神様を私たちの生活世界にもう一度迎えることから始める。人類はもう近代化、世俗化、世界化という美名の下、追い出してしまった人類の真の親となられる神様をもう一度迎えなければならない。そういう慕心の文化の中から、人間は真の自由と解放を感じ、真の幸福を享受することができる。

このように神様を生活の中心に迎えた中で、第 1 祝福の生き方 (心と体の統一、個人の平和)、第 2 祝福の生き方 (夫と妻の和解、家庭の平和)、そして第 3 祝福の生き方 (人間と自然の共生、地球の平和) を生活と共に丹念にゆっくりと成就していかなければならない。心情と真の愛の成長は、時間と共に経験と共に徐々に成熟して行きながら、成長期間と共にゆっくり考えながら生きていけば良い。21 世紀に入って『のろさの美学』とか、『生きるということの意味 (余分の幸福)』18) という本が多く呼応を受けるのも、みな生命と霊性の時代を迎えて、真の良く生きるということが何かについて人類の知恵がそちら側で方向を定めて行くのではないかという思いがする。

私たちが生きてきた 20 世紀の現代的生き方では、前述で少し言及した統一思想的意味での平和的人生を 生きることができなかった。発展と競争の市場論理だけで私たちの人生の全領域を裁いたためだ。さらに科学と技術の力を戦争に注いで、お互いをどれほど疲労させ、

第1世界や第3世界などに分けて、民主や共産に分裂し、どれ程みじめに生きてきたのか？ 私たち一人一人の人生の次元で考えてみても、技術によって支配された20世紀や今日も大部分の人々がみ意を思惟する心よりは表象する思惟、計算する思惟に縛られて、心情的価値を無視する傾向が多くなっているのでははないだろうか？それでハイデッガーは、現代を形而上学（哲学、み意を思惟する心）が技術（計算する思惟）により代替された時代と言った。技術時代を生きる人間たちは待つことを知らない。周囲の自然や人々に対して追いついて（Ge-stell）何かを生産して出せと責め立てる。19）それで自然が破壊され、人々の関係が荒果てていった。言い換えれば、統一思想で強調する第3祝福と第2祝福の生き方が徹底的に壊れていきつつある。神様の3大祝福は、個々に離れているのではない。3大祝福の生き方は、徹底した共属関係にある。

現代人たちのこの世知辛くなって砂粒のように粉々になっていく人生の雰囲気、時代の兆候を克服できる方案は、果たして何か？筆者はそれを先立って訓読、み意を心に刻むための思惟だと語った。み意が生命だ。人間はみ意が共になければならず、み意が確立されなければならない。み意が技術によって代替される瞬間、人間の意味付与の作業が喪失して機械や技術によって統制される瞬間、人間の生は疲弊され生命力が落ちていく。心情が死んでいくのである。

このような現代文明の雰囲気を看破された文鮮明先生は、全世界に向かってみ意を探してみ意を心に刻む生き方、3大祝福を通じた心情文化世界に転向することを要求されたのである。私たちが文鮮明先生のみ言を丹念に分析してみれば、そのみ言は世界や人間、そして神様について徹底してみ意を心に刻むため思惟なる作業をされた後発表されたみ言だということが分かる。筆者はこの時代統一思想研究は、時代精神を含む文鮮明先生のみ言の内容を私たちの時代問題と関連づける心情解析学的な作業で花が咲かなければと考える。このような事態について2004世界文化体育大典閉会式祝賀晩餐の時、文鮮明先生は真の心情革命をおける真の解放開放を通じて、生命と平和の21世紀になることを切実に待ちこがれ、そして、虚無主義を克服できる代案は心情文化世界しかなく、その心情文化生活をする姿は具体的に次の通りだと語られた。多少長いが、私たちがこの時代、統一思想研究の意味と方向について十分に噛みしめてみなければならない内容なので引用しようと思う。

『皆さんが労働と努力をするのは創造です。一生の間働いて生きても疲労を感じないで、ただ楽しく神様の真の愛の世界を感じる、そして神様を慰めて差し上げることができる、そのような道を訪ねて行くことが愛の一生というものです。神様が創造しておいたものを持って、私が趣味のように楽しく天の記念品を作って生きるというそのような考えと態度で一生を生きてみるというのです。東西南北前後左右どこも詰まることはありません。地球上の海という海、五大洋と六大陸を訪ねて行かないところがなくて川という川、山とい

う山は全て訪ねて行って生きるのです。皆さんも先生のように、神様の愛を持って自然を探し友としながら、主人に会えないで嘆息圏に置かれている自然を解放させてあげるといふ心を持って生きなければならないのです。そのような意味で統一運動には「山水苑」運動が必要です。都市の疲弊した文化にとらわれて、個人中心の利己主義的人生の奴隷になって、環境を破壊して各種公害の中であえぎ、子供らの情緒的發展を遮る愚かな人生の枠組みから一刻も早く脱出することが賢い人生になるでしょう。』20)

### Ⅲ.結び：心情事件、力強い生活、美しい慕心の文化のための可能性

私たちは今まで統一思想を心情事件の真理という観点で見て、その心情真理の目で現代文化の中に広まっている虚無主義をいかに克服し、21世紀の新たな生命と霊性の時代をどのように準備しなければならないかについて概括的に調べてきた。合わせて「心情」概念が持つ生命哲学的、霊性哲学的な意味を解釈しようと努力してきた。

私たちが『統一思想要綱』テキストで確認できるように、文鮮明先生は神様の本質を心情という概念で把握し、尚且つ私たちが生きる現実のあらゆる問題に対する解答で心情と真の愛の人生の論理を探された。そしてその人生の論理の通りに生きられる姿を、私たちに具体的に心情真理の実践を通して見せて下さっている。それで文鮮明先生の心情事件の真理は、他でもなくまさに文鮮明先生の人生の哲学である。見えない神様の心情が抑制できない衝動により創造の神秘として現れた今でも、その創造の苦勞が継続しているように、私たちの心情が燃え上がる21世紀の後天時代は、人類の混沌の中に、そのように念願した生命と霊性の時代を開門する考えを育むべき時である。新たな時代を予備する少数の努力、その血と汗で歴史は新たな希望の歴史につながるのではないか。誰かに認められなくても、補償されなくても私の深いところに、私たちの生活中に触れて爆発しているこの神様の心情を、事件化させ外へ表わさなければならない時が来ており、それが私たちの時代の使命ではないだろうか。まさにその私たちの時代的、学問的課題を筆者は心情事件学だと呼んでいる。20世紀末21世紀始め、途方もない転換期的時代を迎えて全世界が巨大なうず巻きの中で急き立てられながらも考える人々によって、生命事件学（金芝河）21）や隠匿事件学（H.Rombach）22）、あるいは存在事件学（M.Heidegger）23）という名前で脱中心時代に中心をつかもうとする努力があるが、各々が時代的、空間的な限界によって東西統合的な大きい思考の枠組みで不足した点を表わしていることが事実である。そういう不足した点などを見直すために考える人々はまた努力を惜しまない。そういう多様な努力は、21世紀の生命と平和の文化を指向する苦勞である。ところで統一思想の立場で見る時、真の生命と平和文化は性状的価値と形状的価値が調和統一を成し遂げるところで可能になる。体（形状的価値）だけで育てるからといってウェルビーイングになるのではない。心と霊性の新たな復活、情動的価値の発見が共に成り立たなければならない。このような統合的

で大きい主眼に基づいて、科学的事実を記述しながらも、形而上学的思索のバランスが取れているように交わった学問、まさに心情事件学を構成しなければならないことは、統一思想の心情真理の味を先に味わった人々の時代的で歴史的な使命である。これから生命と霊性、そして神様（霊界）に関する全ての論理は、統一思想のこの「心情」概念を取り組んだ偉人たち（思想家）の対決になる。

心情事件が起きている心情的存在としての人間の出現は、人類の認識論的進化の最後の段階で、宇宙進化の花である。心情の人間は自身の内部で神様を発見し、そして発見した神様のその意味を謙虚な心で互いに分け合いながら、充満の人生を生きる賢い、落ち着いた人生を知っている人である。「年を取ること」の宇宙のみ意を分かる真の人である。

#### 参考文献……………

- 文鮮明、「体恤信仰の重要性」、『文鮮明先生御言葉選集 40』、成和社、1971。  
文鮮明、「今日の知性人と宗教」、『文鮮明先生御言葉選集 114』、成和社、1981。  
文鮮明、「絶対的価値観」、『文鮮明先生御言葉選集 122』、成和社、1982。  
文鮮明、「真の心情革命と真の解放-釈放時代開門」、2004 世界文化体育大典閉会祝賀晚餐時創始者演説文、2004.7.26。  
世界平和統一家庭連合、『原理講論』、成和社、2001。  
鮮文（ソナムン） 大宇校/統一思想研究院、『統一思想要綱（頭翼思想）』、鮮文（ソナムン）大宇校出版部、2007。  
世界平和統一家庭連合、『祝福家庭と理想天国 I』、成和社、1998。  
世界平和統一家庭連合、『平和訓経』、成和社、2007。  
P.Bruckner、『繁栄の悲惨。宗教化した市場経済とその敵達（Misere de la prosperite. la religion marchane et ses ennemis）』、イ・チャンシル翻訳、ソナムン、2003。  
F.Nietzsche、『権力への意志（Der Wille zur Macht）』、カン・スナム翻訳、チョンハ、1988。  
F.Nietzsche、『チャラトゥストラはこのように言った』、チョン・ドンホ翻訳、本の世界、2000。  
F.Nietzsche、『人間的にあまりにも人間的 I』、キム・ミンギ翻訳、本の世界、2001。  
F.Nietzsche、『人間的にあまりにも人間的 II』、キム・ミンギ翻訳、本の世界、2002。  
C.Darwin、『種の起源』、イ・ミンジェ翻訳、ウルユ文化社、1995。  
P.Ricoeur、『解釈の葛藤（The Conflict of interpretations）』、ヤン・ミヨンス翻訳、文学と知性史、1994。  
P.Ricoeur、『The Conflict of Interpretations（解釈の葛藤）』、ヤン・ミヨンス翻訳、アカネット、2001。  
M.Heidegger、Sein und Zeit（GA2） Vittorio Klostermann Frankfurt a.M.,1977。

- (『存在と時間』、イ・キソン翻訳、カササギ、1998)。
- M.Heidegger、Sein und Zeit (GA2) Vittorio Klostermann Frankfurt a.M., 『技術と転向』:Die Technik und die Kehre、Neske:Pfullingen、1962。  
(『技術と転向』、イ・キソン翻訳、ソグァン社、1993.)
- M.Heidegger、Sein und Zeit (GA2) Vittorio Klostermann Frankfurt a.M., 『**任せること**』:Gelassenheit、Neske:Pfullingen、1977。
- M.Heidegger、Sein und Zeit (GA2) Vittorio Klostermann Frankfurt a.M., 『ニーチェ 1 冊』、『ニーチェ 2 冊』:Nietzsche I、II、Neske:Pfullingen、1961。
- M.Heidegger、Sein und Zeit (GA2) Vittorio Klostermann Frankfurt a.M., 『同一性と差異』:Identitat und Differenz、Neske:Pfullingen 1978。
- M.Heidegger、Sein und Zeit (GA2) Vittorio Klostermann Frankfurt a.M., “Was hei = t Denken? (思惟とは、何をいうのか?)”、Vortrage und Aufsätze  
(GA7、講演と論文母音集)、Neske:Pfullingen、1978。
- M.Heidegger、Sein und Zeit (GA2) Vittorio Klostermann Frankfurt a.M., “Das Ende der Philosophie und die Aufgabe des Denkens”、  
Zur Sache des Denkens (GA14)、Max Niemeyer Verlag Tuebingen、1976。
- S. Freud、『性欲に関する三編のエッセイ』、キム・ジョンイル翻訳、開かれた本たち、1996。
- S. Freud、『文明の中の不満』、キム・ソッキィ翻訳、開かれた本たち、1997。
- S. Freud、『宗教の祈願』、イ・ユンギ翻訳、開かれた本たち、1997。
- A. J.Toynbee、『歴史と世界と人類』、チェ・ヒョクスン翻訳、集文堂、1993 参照。
- シン・サンヒィ、『ハイデッガーと神』、哲学と現実社、2007。
- シン・スンファン、「現代文化での霊性論研究」、『ハイデッガー研究』(第 15 集)、  
韓国ハイデッガー学会編集、2007 年春号。
- イ・キサン、『**タソク**と共に開く韓国語(国語)哲学』、知識産業社、2003。
- イ・キサン、『ハイデッガーの存在事件学(存在真理の発生事件と人間の応答)』、ソグァン社、2003。
- 李相軒、『頭翼思想時代の到来(共産主義を超越して)』、鮮文(ソンムン) 大学校統一思想  
研究院、天安(チョナン): 鮮文(ソンムン) 大学校出版部。2001。
- チョ・ヒョング、「統一思想人間理解の生命哲学的が持つ意味」、『統一思想研究論』総(第  
9 集)、鮮文(ソンムン) 大学校統一思想研究院、2002。
- チョ・ヒョング、「技術と心情(技術哲学の定礎問題と統一思想の課題)」、『統一思想研究  
論』総(第 13 集)、鮮文(ソンムン) 大学校統一思想研究院、2005。
- チョ・ヒョング、「技術時代と超然とした人生(人間と技術、その自由な関係のためのある  
解釈)」、『解析学研究』(第 22 集)、韓国解析学会編集、2008 年秋号。



【Abstract】 .....

The Crisis of Modern Cultural Life、Turning and Unification Thought Cho Hyung-Kook  
(Sun Moon Univ.)

The purpose of this paper is to unearth academic discourses in the view of Unification Thought about why (modern and contemporary) western logic and grammar of life—which had spread worldwide throughout the past 20 centuries— has degraded into a culture of nihilism、 and whether many thinkers consider the coming 21st century to be an era of life and spirituality、 i.e.、 an era of new religiosity.

Therefore、 this paper will meditate on F.Nietzsche and nihilism as a way of reflecting on the last 20 centuries.

It is important to look back on how the 20th century culture that we had lived in has degenerated into a nihilistic culture just as it is impossible to picture the future without contemplating the past.

Also、 this paper will conduct a theoretical study on the nihilistic roots the 20th century culture contains.

Through this study、 this paper aims to fully discuss the three theorists who dictated the cultural circumstances of the 20th century along with Nietzsche— K.Marx、 C.Darwin、 and S.Freud.Next、 this paper will examine what strength and wisdom are needed in order to overcome nihilism、 a threat to such a cultural life in the contemporary era、 in the view of Unification Thought.

In particular、 this paper will contemplate on the epochal significance of Hun-Dok Culture — which is the strength of the thinking and living of human as a being with heart、 — and the relevance between the former and the life of a being with heart.

Lastly、 this paper will emphasize that what the human race of the 21st century must strive for is the establishment of a cultural world of beings with heart through living a lifestyle of 3 Great Blessings— which Unification Thought pursues、 — and that this establishment is the ultimate circumstance for the thinkers of Unification Thought of this age to gather their thoughts.

They must once again focus their resources on the prophetic insight that the truth of the incident of a being with heart provides for and beyond this age.

【Key Words】 Modern Culture、 Nihilism、 Being with Heart、 Unification Thought、 Hun-Dok Culture

---

1) 韓国哲学界でも多くの人々が、21世紀第一哲学として生態哲学あるいは生命哲学の研究に入っている。哲学が私たちの生活と密接な関連があることを考える時、今私たちの時代の核心問題がまさに生態系問題であり、生命問題、さらに霊性の問題である。そしてこの

ような問題意識と関連して、西洋哲学で話した理性的存在、他の存在者などの主管者としての人間理解から抜け出そうする動きが起きている。その間の理性的存在から始まる人間中心主義で生態中心主義、あるいは生命中心主義に転向するという問題意識は、多くの共感を得ている。このような問題意識を土台に主体的に考えることを通じて、その間西洋での生命に対する論議と東洋での生命理解、そして生命に対する今、私たちの生活の中での日常的理解などを通典的視覚で論議した著書等がたくさん出ている。私たちの思想研究所編、『生命と共に哲学 下記』、哲学と現実社、2000：イ・キサン、『**タソク**と共に開く韓国語（国語）哲学』、カササギ、2004 参照。そして 2008 年 5 月 27～29 日まで韓国学中央研究院が主催した＜文明と平和国際フォーラム＞で、特別に焦点を置いた主題が「環境と生態」であり、その間『物質的繁栄に没頭する人類文明に対する反省を土台に環境と生態問題を見つめ、これに通じて『平和構築に対する真剣な見解』を模索してみようという問題意識が浮上していることを私たちは知っている。世界日報、2008 年 5 月 20 日、23 面。更に 2008 年 7 月 26～29 日まで開催された世界女性哲学者大会（13th IAPH）と 2008 年 7 月 30～8 月 5 日まで開かれた第 22 次世界哲学大会（XXII World Congress of Philosophy）の大きな主題が、各々「多文化主義と女性主義（Multiculturalism and Feminism）」、「今日の哲学を考え直す（Rethinking Philosophy Today）」から見ても分かるように、今日私たちが哲学を探究するということは 21 世紀生命と平和の文明創建に寄与する生きた研究にしていかなければならない。筆者はこの時代統一思想研究も同じだと考える。

2) 筆者は文鮮明先生のみ言と（平和）運動を合わせて、心情真理事件だと見ている。これは神様の心情が文鮮明先生を通じて、現実世界に事件として知られることに注目し表現した用語だ。従って統一思想も心情真理事件に含まれながら、心情思想、心情哲学と命名することもできると見る。このような内容と筆者の問題意識に対する詳しい内容は次を参照。文鮮明、「体恤信仰の重要性」、『文鮮明先生御言葉選集 40』、成和社、1971。文鮮明、「絶対的価値観」、『文鮮明先生御言葉選集 122』、成和社、1982。チョ・ヒョング、「技術と心情（技術哲学の**定礎**問題と統一思想の課題）」、『統一思想研究論』総（第 13 集）、鮮文（ソナムン）大学校統一思想研究院、2005。

3) F.ニーチェ、『権力への意志（Der Wille zur Macht）』、カン・スナム翻訳、清溪（チョンゲ）、1986、pp.141-142。

4) M.Heidegger, Nietzsche I, II, Neske:Pfullingen, 1961;“Nietzsches Wort 「Gott ist tot」”, Holzwege (GA5), Vittorio Klostermann:Frankfurt a.M., 1977;“Die Zeit des Weltbildes”, Holzwege (GA5), Vittorio Klostermann:Frankfurt a.M., 1977, 参照。

5) M.Heidegger, “Die Onto-Theo-Logische Verfassung der Metaphysik”, Identitat und

Differenz (GA11)、Neske Pfullingen、1978。pp.64-65;シン・サンヒョ、『ハイデッガーと神』、哲学と現実社、2007、pp.127-161 参照。

6) P.Ricoeur、『解釈の葛藤 (The Conflict of interpretations)』、ヤン・ミヨンス翻訳、文学と知性史、1994 参照。

7) 統一思想を韓国人の心情的人生を土台に生じた思想だとし、多くの人々が、統一思想がグローバル的視覚をなくすことになるのではないかと疑求心を持つ。だが筆者の見解によれば、統一思想の心情と真の愛の概念は暮らし、仕える、空にすること、分ける人生観と価値観を持った韓国人の宗教的、あるいは人生の伝統の中から出てきた概念であり、これは西洋哲学での自然観と技術的世界観とはとても対照的である。統一思想は韓国人であられる文鮮明先生の思想として 21 世紀が抱いている多くの問題-環境、生態、霊性、文明、平和-について根本的な応答を与えることができる鋭い洞察力と悟りを抱いている韓国思想と言える。韓国思想とは何か？それはまさにこの地に住む人がこの地で生きながらにぶつかる世界化された状況に対して挑戦し応戦しながら育かれた思考の整理、体系化ではないだろうか？私たちはもう統一思想こそ韓国思想であり、世界化された状況からあふれ出る多くの人生の問題について、多くの代案と解決点を提示することができる巨大論理だと一度臆せず叫んでみよう。最も韓国的なものが最も世界的ではないだろうか。ここで最も韓国的というのは、世界の人が共感できる普遍性と真理性を表わしているという心情的理由と心情的人生の深さをいう。李相軒院長はこのような問題意識で神様の心情を呼ぶことに自身を投げ出されたのである。

8) 李相軒、『頭翼思想時代の到来 (共産主義を超越して)』、鮮文 (ソナムン) 大学校統一思想研究院、(天安 (チョナン) : 鮮文 (ソナムン) 大学校出版部、2001)、p.172。

9) イ・キサン、『**タソク**と共に開く韓国語 (国語) 哲学』、知識産業社、2003。特に pp.303-345 参照。

10) ハ・イノ、『ソウル マネジメント』、イルソンブック、2008 参照。

11) Pascal Bruckner、『繁栄の悲惨。宗教化した市場経済とその敵たち (Misere de la prosperite.la religion marchane et ses ennemis)』、イ・チャンシル翻訳、トンムンソン、2003 参照。

12) A.J.トインビー、『歴史と世界と人類』、チェ・ヒョクスン翻訳、集文堂、1993 参照。

13) 現代文化を現代性の過剰に具現された体制で見ると、現代文化の特徴の理性中心、人間中心による問題を克服して脱現代的靈性論を模索していることに対して、次の著書を参照することができる。シン・スンファン、「現代文化での靈性論研究」、『ハイデッガー研究（この土地の存在事件を探して）』（第15集）、韓国ハイデッガー学会編集、2007年春号。567-596参照。

14) 今日の私たちが生活的に体験している総体的な危機を、正しく直視した土台の上に、私たちは統一思想の原相論と本性論、そして存在論を新たな次元で読んで補完し、新しく提示する努力を継続しなければならない。

15) 世界平和統一家庭連合、『平和訓経』、成和社、2007参照。

16) M.Heidegger, “Spiegel-Gespraech mit Martin Heidegger” (23.September 1966), Reden und Andere Zeugnisse eines Lebensweges (GA16), Vittorio Klostermann Frankfurt am Main., 2000.p.671. :『統一思想要綱』では、ハイデッガー哲学について、本性論で集中的に扱っている。言い換えれば、統一思想の人間理解（心情的人間、ロゴス的人間、創造的人間）に立って、ハイデッガーの現存材（Dasein）としての人間理解について批判をしている。ところで統一思想でのハイデッガー哲学に対する理解は、主に伝記作品である『存在と時間（Sein und Zeit）』に依存している。従ってハイデッガーの後期思想まで考慮してみるならば、多少合わない部分もなくはない。例えば、ハイデッガーの死方世界（Geviert）論議とか「私の哲学は神を待つことだ」などの命題に対するさらに深い論議にならなければならないと考える。統一思想を通じて、ハイデッガー哲学を理解する前に、彼の『存在と時間』だけでなく、現在国内で翻訳されている多くの著書を講読することを薦める。参照。『存在と時間』、イ・キサン翻訳、カササギ、1998.;『現象学の根本問題』、イ・キサン翻訳、文芸、1994.;『形而上学の根本概念』、イ・キサン/カン・テソン翻訳、カササギ、2001. :『ニーチェとニヒリズム』、パク・チャング翻訳、知性の泉、1996. :『真理の本質について（プラトンの洞窟の比喩とテアイテトス）』、イ・キサン翻訳、カササギ、2004。次にハイデッガー哲学についての研究書では次の著書等を薦める。イ・キサン、『ハイデッガーの実存と言語』、文芸、1991. :『ハイデッガーの存在と現象』、文芸、1992.;『ハイデッガーの存在事件学（存在真理の発生事件と人間の応答）』、ソグァン社、2003。イ・キサン、『**タソク**と共に開く韓国語（国語）哲学』、カササギ、2004. : パク・チャング、『野道の思想家・ハイデッガー』、トンニョク、2005 : チョ・ヒョング、『ハイデッガーの**現死**実性の解析学（人生・心配・本来性 概念分析を土台として）』、博士学位論文 韓国外国語大学校、2008。

17) 後期ハイデッガーは、『存在と時間』で展開した実存的意味としての世界概念を越えて、

死方世界（Geviert）論理で自身の世界概念を消化させると同時にデカルト以後西洋近代的意味の世界概念を克服しようとした。死方世界とは、地と空そして神的なものと死ぬ者（人間）が互いに鏡遊びを通じて合わさり自然に形成される世界をいう。ここで筆者はハイデッガーが人間を死ぬ者で表現したことに注目する。人間を理性的動物や神の形状でなく死ぬ者として見たものだ。これは人間（命）の**現死実性**を的中させることと同時に、人間の有限性を切実に実感したところ、前述に命名した名前であろう。死方世界に対する詳しい内容は、次の著書等を参照。M.Heidegger、“Das Ding”、Vortrage und Aufsätze、Neske:Pfullingen、1978.pp.シン・サンヒィ、「死方世界中に居住すること：自然親和的生き方に対する摸索」、『ハイデッガーと神』、哲学と現実社、2007.pp.200-230 イ・キサン、『ハイデッガーの存在事件学（存在真理の発生事件と人間の応答）』、ソグァン社、2005.pp.173-185。

18) ピエール サンソ、『生きるということの意味』、キム・ジュギョン翻訳、トンムンソン、2005。

19) ハイデッガーは、西洋の形而上学がその時その時の存在の歴運により、アイデア、エネルギー、主体、意志、力への意志などで刻印されてきた。これが現代には技術（Ge-stell、責め立てること）の形態で現れてきたと見る。ハイデッガーは人間が非隠蔽性との脱自的な関連で、この非隠蔽性からひどく責めつけるようになる様式は、集約させる特徴を帯びている。Ge-stell で前の「Ge-」は非隠蔽性のひどく責めつける根本特性での集約させていることを指し示し、後の「-stell」は、人間をひどく責め立てること、また存在者を多様な注文要請の方式でひどく責め立てることを意味する。参照。イ・キサン、『ハイデッガーの存在事件学（存在真理の発生事件と人間の応答）』、ソグァン社、2003。pp.195-298：「Gestell」についての更に詳しい内容は、次の著書を参照。イ・キサン、「現代技術の本質」、『講演と論文』、イ・キサン、パク・チャング、シン・サンヒィ翻訳、理学社、2008。pp. 179-181：イ・ソニル、『ハイデッガーの技術の問題』、博士学位論文、ソウル大学校哲学科、1994：チョ・ヒョング、「技術時代と超然とした人生（人間と技術、その自由な関係のためのある解釈）」、『解析学研究』（第 22 集）、韓国解析学会構成編集、2008 秋号。

20) 文鮮明、「真の心情革命と真の解放-釈放時代開門」、2004 世界文化体育大典閉会祝賀晩餐時 創始者演説文。2004.7.26

21) 金芝河、『生命、このきらびやかな**総体**』、トンガン出版社、1991；『生命』、ソル、1994：『生命と自治、生命 思想・生命運動とは何か？』、ソル、1996：イ・キサン、「金芝河の生命事件論。生活の中で成し遂げなければならない宇宙的大解脱」、『解析学研究第 12 集。ロマン主義解析学』、韓国解析学会編、哲学と現実社、2003、pp.495-574 参照。

22 ) H.Rombach 、 Strukturontologie.Eine Phanomenologie der Freiheit 、 Freiburg/Munche:n:Alber 、 1971;Substanz 、 System 、 Struktur.Die Ontologie des Funktionalismus und der philosophischen Hintergrund der modernen Wissenschaft、 2Bd.、 2 Aufl.、 Freiburg/Munche:n:Alber、 1981、 参照。

23) M Heidegger、 Beitrage zur Philosophie、 Frankfurt a.M.、 1989;Besinnung、 Frankfurt a.M.、 1995 イ・キサン、 『ハイデッガーの存在事件学 (存在真理の発生事件と人間の応答)』、 ソグァン社、 2005 参照。